わりかしエッチなウサギさん

新梁（十八禁）

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

強気で勝ち気でオラオラ系のミルコさんが幼馴染兼恋人とえっちする時は完全に受け身になって甘えまくりのあまあまウサギになんてなるわけ無いだろ

目　次

キスの話 ―― 1
初めての話 ―― 18

キスの話

庄田家長男、庄田反撃には一人の幼馴染が居た。その幼馴染の名は兎山ルミ。褐色の肌と真白の髪、側頭部から天に向かってピンと立つ長い兎耳が特徴の勝ち気な美人である。

反撃とルミの出会いは僅か生後数ヶ月にまで遡る。家が隣同士であった二人が初めて顔を合わせた時、母親の腕の中でぬぼーっとしている反撃を、同じく母親の腕の中に居たルミが何故か必死になって蹴ろうとしていたと、二人の母はそう語る。

それから彼等は幼稚園に入り、ルミはその勝ち気な性格と生まれながらに発現していた個性による優れた身体能力、そして幼いながらも周囲に美人になる事を期待させる容姿で瞬く間に園のカーストトップに躍り出た。周囲には常に男女数人の取り巻きがおり、彼女がドタバタ突っ走る後を何人もの園児が続いていき、彼女の好きな遊びや遊具が園内で流行る。ルミは齢五歳の頃には幼稚園児という小さな獣たちの長として君臨していたのだ。

「ハンゲキー！　いっしょにヒーローごっこしようぜ！　おまえヴィランな！」

「はいぃ？　いやだけ……ああ分かった、分かったから。やるから」

ただ、その園内最大規模を誇るルミの群れに加わらない男が一人居た。何を隠そう幼馴染の庄田反撃である。

この男は他の園児達との遊びには積極的に参加せず、普段は幼稚園で新聞紙遊びのために置いてある古新聞をじっと眺めていたり、子ども百科事典をひたすら読み込んでいたり、かと思えば目的もなく園の広場をグルグル走り回ったり登り棒をひたすら登ったり降りたりしている妙な奴、有り体に言えば不気味な奴であった……が、しかし。どういう訳かルミはこの男の事をえらく気に入っており、何かとこの男の側に寄っていっては遊び相手をねだっていた。

「やいヴィラン！　ドロボーするな！　うさぎヒーロールミがあいてだ！」

「うるせえ！　これを持ってかえらなきゃムスメがどうなるか！

ゼッタイにげ切ってやる！」
「サイドキックー！　かかれー！」
「は？　ちょっ多くね!?」
　そのヒーローごっこ（という名の多対一鬼ごっこ）を見ていた幼稚園の先生は反撃の持つ何ともアレなヴィラン像に、新聞を子供の手に取れる場所に置いておくべきか少し悩んだという。

　そうやってルミはすくすくと健全に、反撃は若干ひねくれつつも身体的にはまあ健全に育ち、小学生の中学年になった頃にある微笑ましい？　事件が起こった。
　それはルミが相変わらず近くの河原をひたすら走っていた反撃の首を引っ掴んで公園へ連れて行こうとしている時。その通り道にある小さなアパートの一室から何やら切羽詰まったような、高い喘ぎ声が聞こえてきたのだ。
　咄嗟にギクリと身を固める反撃。そして今聞いているものが一体何なのか分からずに怪訝な顔をするルミ。ルミは好奇心につられてそのアパートの窓を覗き込んだが、すぐさま反撃に頭をシバかれて公園に引きずられていった。よってルミは『決定的』なものを見る事は無かった。
「……なーハンゲキー」
「アんだよ？　まだ覗きてえのか？　ヒーローになりたいのに覗きなんかすんじゃねえ」
「うるせーな！　もうしねーよ！　そうじゃなくて……あのさ……」
「ん？」
「さっきの人……チューしてた」
「……へえ」
　その後の話の展開をある程度察した反撃は周囲を見回す。丁度家の近くの公園に行こうとしていた為、今現在自分の歩いている通りには実家である庄田家が建っていた。反撃はルミからゆっくりと離れ、不意打ちでダッシュして庄田家の玄関に転がり込んでドアを閉め……る前にルミに反対側のドアノブを握られた。

「逃げんな！　ハンゲキ！」
「まだ早い！　まだ早い！　まだ早い！」
「ちょっとくらいいーだろ！　開けろって！」
「駄目！　無理！　まだ早いって！」
「いつならいいんだよ！」
「……まだ駄目だって！」
「だからァ！」
「いつか！　いつか！　今はまだやめとこう！　いつか！　な!?」
「フザっけんなァ！」
　そうやって玄関先でガッチャンバッタン扉を開け閉めしている反撃の頭を、庄田家次男を妊娠中の反撃の母親が持っていた新聞紙でぶっ叩く。
「アイッデェァ!?」
「玄関壊れるでしょうが。全く……今度は何？」
　反撃とルミのイザコザを何度となく処理してきた歴戦のオカンである庄田母はまずは目の前に居る二人の意見を聞く。反撃とドアを開けたルミは、同時に互いを指差した。
「だってこいつが窓を頭シバき込んで他人のキス見て逃げやがった許せねえ！」
「一人ずつ喋りなさい！」
「アだっ！」
「イデッ！」
　そうしてリビングに二人を呼び寄せて麦茶を渡し、それから二人の言い分を聞いた庄田母は、腹を抱えて爆笑した。
「アッハッハッハ！　そんで二人して玄関で戦ってたの!?　キスさせろーって！　まだ早いーって!?　アッハッハハハ！　お腹痛！」
「笑うな……」
「クソ……」
　苛立つ反撃と今更に自分のした事が割と恥ずかしい事だと思ったのか顔を赤くして未だ反撃を睨みつつも細い声で悪態をつくルミを見て、庄田母は机に頬杖をついてニヤニヤと笑った。

「やってあげりゃ良いじゃないのキスくらい」
「はっ!? ばっおま、はぁ!? ルミはまだ小五だぞ！ 小五！」
「そりゃアンタもでしょーに。全くなんでこんなにマセてんだか……ねえルミちゃん」
「……ぁい」
　顔の熱を冷ますようにチビチビと麦茶を飲んでいた所にキスするしないの話を蒸し返されて恥ずかしそうに顔を赤くしながら自分を睨むルミに笑みを深めつつ、庄田母は反撃を指差す。
「ルミちゃんは、誰でもいいからとりあえずキスがしてみたいの？ それとも、『反撃と』キスがしたいの？」
　再び慌てる反撃を無視してルミを見つめる庄田母。ルミは更に顔を赤くして下を向き……それでも反撃の服の袖をグイッと引っ張った。
「……だってさ。男の見せ所よ反撃」
「……ええ……うぬおぉ……小五……小五……」
「だからアンタも小五でしょ。あ、私が居ると邪魔かしら!? じゃあ席外すわね！ ごゆっくりー！ おほほほほ！」
「るっせぇババァ笑うな！ ……ルミ、部屋行くぞ」
「……ん」
　反撃の部屋に入ったルミは、本棚に新しい漫画の新刊が入っている事に気が付き、いつもそうしている癖で本棚から漫画を抜く。それを見た反撃はどうやら意識が漫画に行ったようだと内心ホッと息を吐きつつ扇風機を動かし、タンスからシャツとタオルを取り出して汗でベタベタになった肌を拭う。
「……」
「はーあ、全く……あの出歯亀っぷりにも困ったもんだ全く……」
　汗を拭ってシャツを着替え終わり、定期購読している『月刊マイヒーロー』（対象年齢・十五歳）をペラペラ捲っているとトントン、と肩を叩かれた。
「ん？ ルミ……」
「……ハンゲキ」

先程母にからかわれた時と同様に顔を赤くしたルミの潤んだ瞳には、不満感、そして、隠しきれない不安感が混在していた。それを見て溜息を一つ吐いた反撃は、ルミの白い髪と、顔の横から生えるフワフワとした耳を毛並みに逆らわないように優しく撫でた。
「あー……うん、今のは俺から来てほしかったんだよな……悪かったって……お前とキスしたくない訳じゃないんだ。ホントだぞ？」
「……じゃあ、すりゃいいじゃん」
「そうなんだけどな……うん、そうだよな」
一呼吸、しっかり吸ってから、ルミ、と一言名前を囁いた反撃は、彼女の緊張でガチガチに固まった肩を柔らかく撫でてからその身体を引き寄せる。そして、キュッと固く結ばれた唇に、舌で少し湿らせた自分の唇を軽く押し当てた。
ピン！　と芯が入ったかのように真っ直ぐに立つ兎耳。ビクリ、と震える身体。しかし逃げようとはしないその未成熟な身体を少しだけギュッと強く抱きしめて、反撃はその唇を離した。ルミは変わらず赤い顔で、その小さな手を唇に当てて今の感覚を反芻しているようだった。兎耳は忙しなくピロピロピコピコと揺れに揺れている。
そんな彼女の頭を反撃がよしよしと撫でていると、呆然といった様子だったルミの目尻がキュッと釣り上がり、反撃の肩をバシバシと結構な力で叩き始めた。
「オァッ、イデっ!?　何、何だよ!?」
「るっせっ、るせえ！　何だお前、何なんだよ！　もう！　クソ！　なんかムカついた！」
「意味わかんねえ！」
「なんでお前、そんな慣れてんだよ！　ガチガチのアタシがバカみたいじゃねえか！　このっ！」
「待てっ、おま、足は止めろォ！　お前足強いんだから！」
その後ギャーギャーと騒ぎ立てながらも更に二、三回程同じ経験を積んだ二人は、その日庄田家で食事を取り、反撃は煮物の人参をルミに全て強奪された。

十五年後。反撃、ルミ、二十六歳。

とある街中。夕暮れ。

「……あん？　何見てんだ反撃」
「母さんが家の片付けしてたら見つけたんだと。写真送ってきた……ホラ」
　中型トラックを改造して作られたキャンピングカーがラビットヒーローミルコの自宅であり、また、そこはミルコの唯一のサイドキックである吸撃ヒーローインパクトの住居でもある。今日解決した事件場所の近場にあったスーパー銭湯で身体を洗い、併設された食堂で食事をとった二人は同じベッドに並んで寝転がって束の間の休息に浸っていた。
「あ？　……あー、なんか覚えてんぞ。これ確かアレだろ？　レンゲキが産まれた時の」
「そうそう。絶対産まれた二連撃と写真取ろうぜ！　って盛り上がったのに結局難産でその日面会できなくて……何でか知らねーけど病院前で二人で写真撮ってんだ」
「何で二人で写真撮ってんだ……何も意味ねーだろコレ」
「覚えてねーけどとりあえず撮りたかったんだろ。写真を」
　そう言って懐かしげに写真を眺める反撃の腕に自分の腕を柔らかく絡めたルミは、そういえばこの頃だったよな、と厚い筋肉に包まれた肩にグリグリと顔を押し当てながら呟く。
「ん？　何が」
「アタシと反撃が初めてキスしたの」
「……あー、小五……」
「あー！　あん時お前小五なのメチャクチャ気にしてたよな！」
　ケラケラと笑うルミに少しだけ気分を害した反撃は、持っていた携帯をベッドの横の充電器に差し込んでから身体の向きを反転させ、あの時に比べ随分と厚く、そして硬くなったルミの肢体を腕の中に抱え込む。そんなに過剰な反応をされるとは思っていなかったルミは軽

く目を見開き、その大きな耳がパタパタ、と慌てたように揺れるが、やがて彼女は挑発するような見下すような、そんな目つきで反撃を睨んだ。
「何だよ、抱いて誤魔化すってか？　アァ？」
「……そうだよ」
「……ン」
　かつての焼き直しのように、ルミの耳を軽く優しく撫でてから部屋着のシャツに包まれたその身体を抱き寄せ、反撃を待つ唇にその唇を合わせる。耳を撫でていた手を後頭部に持っていってルミの頭を固定し、角度を細かく変えながらより深く、より深くと唇を軽く食む。
「……っ、ふ……ンンっ」
　耳と同じように後頭部を軽く撫でながらルミの上唇と下唇を自分の唇で挟むようにして何度も愛撫した反撃は、ポンポン、と軽くその頭をあやすように叩いてから唇を離した。途端若干息を吸えていなかったらしいルミが思い出したように呼吸をする。
「……ッハ、っハァ……」
「大丈夫か？」
「……あんま舐めんなよ。こんくらい平気だっつの」
「お前キスの時に息止める癖治らねえなあ」
「るせえ！　馬鹿！　っんあ、今触んな！」
「まあまあ」
「っん、ン！　ンふ……止め……って言ってんだろ！」
　下腹の付近を触っていた癖の悪い反撃の手を叩き落とし、ルミは反撃に両手を差し出した。
「ルミ？」
「……ん」
「抱っこか？」
「ん！」
「はいはい……と」
　少し機嫌を悪くしたルミをあやすようにその身体を抱え込んだ反撃は少しルミを揺らし、（随分重くなったなぁ）等と思った。ルミにバ

レたら確実に更に機嫌が悪くなるが、彼女は反撃の鍛え上げられた肉体にしがみつく事に没頭していた。
「反撃」
「どーした？」
「……キス」
「あいよ」
　ルミを抱く為に横向きになっていた身体をベッドの上に起こし、ルミを胡座をかいた自分の足の間に座らせてから先程の様に後頭部に手を当て、何度か触れるだけのキスを繰り返す。それから唇を深く合わせ、何度かふにふにとした頼りない感触を味わってからルミの唇に舌を這わせる。
「ッ、ふ、ン」
　唇の端から端まで、何度も舌を往復させるとやがて『もう入っていいよ』とでも言うかのようにルミが薄く唇を開く。その間に遠慮無く舌を差し込み、ツルリとした歯を舐め、歯と歯茎の間を舌でなぞり、口内を隅々まで探る。そこまでするとルミがピク、ビクリ、と身体を細かく震わせ、反撃の舌に快楽を感じている事を伝える。負けず嫌いな性質からか、必死にんふー、むふー、と鼻で息を吸うルミが愛しく思えた反撃はより一層愛情を込めて慈しむように頭を撫でる。その掌越しにもルミの兎耳がパタパタと揺れている事が察せられ、反撃は内心少し笑いつつも優しく柔らかく頭を撫で続けた。
「っは」
「っぷは、はぁっ、ハァ……」
　数分間舌で口内をまさぐってから、ゆっくりと口を離すとルミは荒い息をあげ（やはり慣れていないこともありやりにくくはあったらしい）、しかし勝ち誇ったように反撃を見た。反撃はその視線を受け、『よくできました』と言うようにルミの頭を撫でる。「ガキ扱いすんじゃねえ」と言いつつも、ルミは手を押し退けず、むしろ掌にグリグリと頭を押し付けるように動かしていた。
「けど、珍しいな」
「あ？　何がだよ」

「こんだけやってお前が『おねだり』してこない事がだよ」
「はアっ!?　お前アタシの事何だと思ってんだ！」
「過剰性欲」
「ぶっ殺すぞ！」
　ガルル、と歯をむき出しにしウサギらしからぬ攻撃的な表情で反撃を威嚇するルミだが、彼女は平均して週二十回程度は反撃に精をねだっている。これで過剰性欲……端的に言えばヤリ狂いではないとはとても言えないだろう。
　反撃はこちらを威嚇するルミを抱き寄せてその頬や首筋、耳朶や鼻梁と顔全体にちゅ、ちゅ、と唇を触れさせる。ルミは誤魔化されているのは理解しつつも（誤魔化されるも何もルミの過剰性欲は事実なのだが）キスの心地良さに不本意ながらも絆される。不機嫌そうなしかめっ面で反撃のキスを受け、ある程度満足がいったら「ん」と軽く唸って自分の唇に反撃を誘導した。
　強気で乱雑で、いかにも相手に股がって性が出なくなるまで絞り尽くすような性交をしそうな彼女であるが、実際にはとことん受け身で甘えたがりなのだ。兎は寂しがりだというのはどこで聞いたんだったか、等と思いつつも反撃は初めからルミの細い顎を軽く押さえ、その口内を舌でくちくちと触れ回る。やがてルミはツンツン、と誘うように舌を反撃のそれに触れさせ、その誘いに応じた反撃の舌と静かにじっとりとした絡み合いを始める。
　反撃はガタイが良く、ルミとは結構な差がある。そしてその差は体格だけではなく、顔や掌といったパーツごとの差にも現れる。それは舌の大きさも同様で、ルミの顎が非常にシャープなのも合わさって反撃に比べルミの舌はかなり小さい。よってルミが必死に反撃の舌に自分のそれを絡ませても、反撃を攻めているといった感じにはならない。いいとこ大好きな飼い主に飛びかかる小型犬の様相である。
　ヌルリと舌を動かし、じゃれてくるルミの舌に答えるように動きを合わせて撫で擦る。「んッ、ふゥっ、くンっ」と舌を合わせる生々しい快楽に微かな喘ぎを漏らしつつ細かく身を震わせながらも反撃の背中に手を回してそれに耐えるルミは、反撃が自分の気付かぬ内に股関

に手を寄せ、ゆったりとしたパジャマ代わりの短パンの上から陰部をギュウッと押さえつけた事で限界に達し、「ッハぅんッ……！」と明確な快楽の声を上げ、背中を丸めて反撃の肩をガッシと握り締めた。
「……んぁ、オイ……！　触っていいって言ってねえぞ……っンっ……！　フゥっ、ン！」
「いや、ちょっとキスするだけでトロトロにならないルミって新鮮だなと思うとムラっとな」
「んアッ、アタシにだって……ん、ンン、んぅッ！　そういう日くら……オイ手ェ止めろお前……く、アンっ！　ん、ン、ンッ、んあぁっ！」
　ルミが何か言っている隙に短パンの中に手を入れ、薄く頼りないショーツ越しに膣口をなぞると、先程まで抑えていた喘ぎ声が遂に明確な艶のある嬌声に変わり、ルミは続く愛撫に腰をビクンビクンと絶え間無く震わせながら反撃を思い切り睨んだ。
「ンの、クソ野郎！　お前こそ過剰性欲じゃねえか！　この……っアッ、アッアッ！　……フん、ンンっ!!」
「悪いな過剰性欲で。お詫びにお前の性欲解消付き合ってやるよ」
「アタシは今……ッ、溜まって無いからァ……んウゥっ！　アンっ！」
「普段ほぼ毎日散々深夜まで付き合わせといて自分が溜まってなけりゃヤラないってそりゃちょっと無いんじゃねえの？」
「うる……せっ、あッ、アっ！　まんなかぁ……グリグリ、すんなぁ……！　それぇ……や……め、んあっ！　あっん、ふ、んぁあ！」
　言葉はキツくとも先程と違い手は払われないどころかずっと反撃を抱きしめているし、肩に自分の額を当てて必死に耐えようとしているルミの普段からは想像もできない程に甘ったるい声は完全に彼女のスイッチが入った事を反撃に確信させた。一年に一度見るか見ないかというレベルのレア度を誇る『発情してないルミ』も見納めかと反撃はそうしたのは自分であるという事実を差し置いて心の中でヤレヤレと溜息を履きながら、ショーツの内側に手を入れ愛液でビシャビシャになった陰部をギュッ、ギュウッ、と一定間隔で圧迫する。
「あっ、あっ待っ、ハンゲキ……アッ！　ん、ンッ！　止め、ハンゲキ、

ゾワゾワ、するからっ！」
「良いぞ、もっとゾワゾワしような。今から上の方グイグイするから、ちゃんと感じろよ」
「あっ、あっあっ！　ハン……ハンゲキ、すご、凄っ！　すごいぃ……！　ゾワゾワする……！　んあっ、ああッ！　はんげき、ハンゲキ！　もっと、もっとぎゅって、ギュッてぇ、あっ、んっ！」
自分の背中に手を回してかじりついて来るルミの膣内に太い指を入れ、腹側のプツプツとしたごく小さな突起が密集している部分を探り当て、そこをグイっ、グイっ、とヘソに向けリズミカルに圧迫する。するとルミは泣きそうな声で喘ぎながら反撃を手と足で強く抱き締め、反撃にも自分を抱き締めるように命じる。
「はいはい、ほら、ギューッと……発情すると途端に子供っぽくなるなあお前は」
「アッ、あんっ！　ハンゲキ、もっとぉ」
「はいはい、もっとな。もう何も聞こえてねえなコレ」
それもこれも初体験が早すぎたのが悪いんだ。反撃は前述したキスの時のように結局様々な状況というか場の空気に押されて当時まだ色を知るには幼かったルミの花を散らしたのは紛れも無く自分自身である事実を意図的に無視しつつ、顔を上げてキスをねだってきたルミに唇を落として膣内を圧迫する動きからズリズリと膣壁を擦る動きに変え、その変化にビクンと大きく震えるルミの身体をその腕と足で押さえつけた。そのまま手足を痙攣させる彼女を押さえつけつつ手を動かし、一度快感の絶頂へと登らせる。ルミは息を詰まらせ、ビクンビクンと大きく身体を跳ねさせながら静かに快感を享受していた。防音性がそこまで良くないキャンピングカーで毎日欠かさず性交を繰り返す内に、ルミには静かに快感を受け止める癖がついていた。
「ッッッッっンクゥゥゥ……っ、っ、っぶは、はっ、ハッ！　ハァッ！　ハァーっ！」
「……お疲れ、ルミ。もう入れるか？　それとも……」
「……っはっ、はぁっ……も……もっかい……もっかい、ギューって、

やって……」
「あいよ」
　そこから十数分、ルミの膣を指の強さを変え押さえる角度を変えと刺激に変化を与えつついじめ抜きルミを数回絶頂まで登らせ、全身に力が入らないくらいにトロトロにしてやると、反撃は我慢しきれないというようにふやけた指でベッドの脇を漁り、まぁまぁな大きさの箱を取り出した。それはごく普通のどこにでもある業務用コンドーム、百五十枚入りである。中身が相当減っている事からもこの二人の性生活の片鱗が見えるというものだ。
「ルミ、コンドームかなり減ってきた。次の箱買ってたっけ？」
「ハァ、ハァッ、ハンゲキ、んっ……はやく……ふぁ……っ、何してんだ……ふっうぅ……はな、れんな……ギュ、って……しろ……」
「ハイハイ……全く、色狂いのお姫様だよマジで」
　反撃は手早く汗で尻部分がビタビタになったズボンとトランクスを下ろし、ベッドの下に放る。そして慣れた手付きで手早く自身の性器に避妊具を装着すると、既にホカホカと湯気が上がるのではないかという程に出来上がったルミの女性器にこれまた慣れた様子で先をあてがう。
「ルミ、良いか？」
　ルミは既に声を出すのも億劫なようで、自分の着ているシャツの襟を汗とよだれで濡らしながらも覆いかぶさってきた反撃の両手をギリギリと握り締め、フッ、フッ、と興奮の息を吐き出しながらコクコクと何度も頷く。
　かれこれ十年近くも彼女と繋がり続けている反撃には間違い無く愛情と肉欲はあるが、今のルミのようにここまで興奮する事は今となっては滅多に無い。この子は何で十年ヤリ続けても毎回初めてみたいに興奮できるんだろうな等と考えていると、自分の下で泣きそうな顔をしたルミが焦ったような声を上げながら反撃の腕を揺さぶった。
「んぁ、ハンゲキ、ハンゲキ、早く、早くしろって……なぁ、入れて、早く……」

「……そういや焦らしプレイってした事無かったな」
「じら……嫌だ！　入れて、入れろって、なぁ、ハンゲキ……アタシそれ、嫌だ……っクんんッ……ッフぅあっ、んぁっ！　あっ、入っ、ハンゲキ、ハンゲキ！　ギュって、ギューってぇ！」
「、ハイハイ……全く、可愛い女奴だな」
　反撃がルミの背中に手を回し、ぬるい汗でビシャビシャになったシャツを気にもせずに力強く抱き寄せるとルミは感極まったような声を上げ、好き好きと溢れる好意を伝えるようにその肩に自分の顔をグリグリと押し付けた。
「ハンゲキ、ハンゲキッ！　んあ、あんっ！　んう、あ、あ、あっ、ふぁんふぁ！　あっ、はん、はんげきっ、すきだっ、はんげき、あっ、んっ！　あっそこ、はん、げきっあっ、凄、好きッ、好きだっ、からっ！」
　パチュ、バチュ、と湿った衝突音が密室に響き、精一杯押し殺した快楽の声の間で反撃に精一杯愛を伝えるルミ。反撃はルミの頭を一撫でして、フワフワとしたその柔らかい耳を摘んで自分の方に向け、身体を強く揺らしながら「俺も好きだよ」と囁いた。再び感極まったらしいルミが「ンきゅぅ――――ッッ!!」と喉から絞り出すような高い声を出して反撃をより一層強く抱き締めた。ついでに脱水を案じる程に濡れた女性器もギュウッと力強く締まった。言葉でイケるのか……と反撃は驚きつつも、そんなルミを一層抱きしめて身体全体を揺らすようにぶつける。ルミは快感を受けきれずに半泣きになりながらも反撃のシャツをガリガリと引っ掻き、まるで踏ん張る足場を探すように反撃の背中で脚をばたつかせていた。
「ハンゲキッ、ハンゲキッ！」
「ハイハイ、俺はここに居るぞ」
「ハンゲキ、んあッ、んッ、キス、アッあ、キス……んッ、ッフん、んぷ、んんっ、ちゅぶっ、んぁ……まだ、まだぁ……っあっ、あっあっんッ、んっんっんぶっ、んみぅ……」
　トロトロと蕩けるようなかすれた涙声で最愛のパートナーにキスをねだり、おねだり通りにキスを与えられると嬉々として口内を明け渡し、クチュルクチュルと脳裏に響くような音を立てて舐られる感覚

にゾワゾワと腰を震わせる。唇が離れるとまだ行ってはいけないとむずがるように駄々をこね、苦笑交じりに再び寄せられる唇に歓喜し背に回した腕の力を強める。勿論その間も反撃の男性器はルミの女性器にシッカリとはまり込み、グチグチと小さな音を立てながら奥にある子供を育てる為の小部屋を圧迫していた。
「ハンゲキ、ハンゲキ……ッ」
「……ルミ」
「ハンゲキ、すき、好き、だっ！　ハンゲキッ」
「ああ、俺もだよ。ルミ、大好きだ」
「……っくぅぅ……ッ!!　ハンゲキ！　好き、好きっ、だっ、い好き……！」
「……ッグ、ルミ……もう……」
ルミは常日頃から、この抱きしめ合って口づけを交わしながら、上から押し潰されるように腹の奥を圧迫されるこの姿勢が大好きだと反撃に言い続けていた。反撃から何も要望が無ければ基本的には二人の交わりはこの姿勢一種類であり、たとえ反撃から何かしらのオーダーがあったとしても大体はルミが駄々をこねて最終的にこの姿勢に落ち着く。ルミはこの体勢で反撃の愛を受け止める時間が人生で一番幸せだと確信していたし、現に今人生で一番幸せだった。
「んあっ、んっ、あっ、だせ、だして、出していいぞ、出せ、出せ！」
「ルミッ……っくぁっ！」
「んッ、っ、ああ……震えてる……っはぁ、出てるか？　まだ出るか？　出していいぞ……」
ルミに覆いかぶさっていた反撃が、ビク、ビクン、と数度大きく身体を強張らせてからグタリとルミに体重を預ける。ルミはその姿に言いようもない興奮と愛情を覚えながら、脱力した反撃を抱きしめてその汗で湿った髪の毛をワシワシとかき混ぜる。
「っ……んッ……反撃ぃ……反撃いぃ～～っ！」
「……ルミ……いたた、ハゲる」
髪を少々乱暴にかき混ぜられながらも、反撃はくたりと身体の力を抜いていた。が、その内に身体を横に移動させ、仰向けのルミに半分

だけ重なるように俯せでベッドに沈んだ。倦怠感のある身体を動かして手早く避妊具を外し、ベッド脇に置いてあったゴミ箱に放り込む。ゴミ箱にセットしてあるビニール袋がカサリと小さな音を立て、そこでやっと反撃は人心地ついたと息を吐いた。
「……なぁ反撃、もっかい……」
「早いな⁉　もうちょい待ってくれ……」
「べ……っつに今すぐやろうってんじゃねえよ！　馬鹿！」
　ルミの性欲に恐れをなした反撃の頭をベシンと叩き、上を向いていた身体を反撃の方に向け、今度は柔らかく反撃の頬に手を当てる。壁に寄せられていた枕に顔を突っ込んでいた反撃がそちらを向くと、まだ紅潮している顔で自分の方をじっと見ているルミと目が合った。その普段からは考えられないような柔らかな眼差しに反撃は若干照れつつも、それを悟られないように同じようにルミの頬をムニ、と摘む。
「あん？　……んだよ、照れてんのか？　ウブだな反撃」
　しかし生まれた時からの付き合いであるルミにはすぐにバレ、浮かべる笑みをイタズラっぽいそれに変えた彼女がからかってくるのを反撃はしかめっ面で返した。
「るっせ……ほれ、こっち来い。冷えるぞ」
「んへへ、銭湯入ったのにもう汗まみれだな……そいやあそこファミリー風呂あったぜ」
「どー考えても風呂入るだけで終わんねーだろそれ……ん」
「まーな……ん、んふ……ぅ」
　先ほどと比べてもずっと静かにキスをした二人は、汗だくになった残りの衣服を脱ぎ捨て、互いにヌルリと滑る肌を擦り合わせるように……する前に、ベッド脇で充電していた携帯がヴィラン発生の着信音を鳴らした。
「……は？」
「……あちゃあ……あー、しかも近いな……一般じゃなくてヒーローからの救援じゃねえか……オシ、行くぞ」
「……は？」

半勃ちした男性器をブラブラ揺らしながらベッドの反対側にある棚を漁ってタオルと二人分のコスチュームを取り出した反撃は、片方をルミに渡して自分の汗を拭い始める。
「ホレ、続きは帰ってからだ。それとも俺一人で行ってくるか？　別に良いぞ？　お前は待っててて」
棚に向かって救急装備など色々用意を整えつつパッパッと手際良くコスチュームを装着していく反撃は、背後に居たルミの何かがキレる音を確かに聞いた。

……可愛らしく人懐っこく甘えたがりで、ついでに淫乱な事で知られる兎であるが、個体の性格差を問わず非常に攻撃的になる時がある。それは一体、何か。

「……モタモタしてねーで行くぞ反撃。ソイツ等一人残らず……脱兎の如く、凹ます」
「……クックク……あーいよ」

それは、『発情期』である。兎の個性を持つルミもそれに漏れず、彼女は性交の邪魔をされる事を酷く嫌うのだ。発情期とただの発情はちげーだろと言われるかもしれないが少なくともルミが世界で一番嫌いなのはヤッてる時の横槍だと公言して憚らない。反撃としては本当に公言してほしくないが。
「ァに笑ってんだぁ！　帰ったら続きだかんな！　私が満足するまでだかんな！」
「痛ぇっ！」
ちなみに機嫌の悪いルミは基本的に、無差別だ。反撃に抱かれている時は驚くほど大人しいのだが。反撃はキャンピングカーのドアを閉めながら、ガルルルと歯を剥き出しにして唸るルミの肩を落ち着かせるように何度も叩いた。
「つし施錠オッケー……さぁて、行くかァ！　『ミルコ』！」
「おう、遅れんなよ！　『インパクト』！」

外に出れば先程まで夕日が見えていた街中はすっかりと月の満ちた夜になっていた。反撃は自分の前を走るルミの、月光を受けてキラキラと輝く白い髪とピンと立った耳を見て、己の彼女は最高の女性である事を再確認していた。

「何見てんだァ！　後にしろそーいうのは！」

「うおわっ、味方（俺）を蹴るのは街中では止めろ！」

ちなみにその後連鎖的に何件か起きた事件を解決している間に夜はすっかりとふけてしまい、ルミは向こう一週間機嫌が悪かった。

初めての話

庄田家長男、庄田反撃には幼馴染が一人居る。

「反撃ィ」

「おん？」

「……ちゅー」

「はいはい……っん」

「ん……、ふ……へへっ」

「お前本当にチュー好きなぁ」

その名は兎山ルミ。

褐色の肌とピンと天に向かっておっ立つ二本の兎耳が特徴的な強気の美人さんである。

反撃は小学生の頃なんやかんやあってこのルミと男女の幼馴染にしては見ての通りあまりにも距離が近過ぎるような関係となってしまい、外ヅラは何でもないように見せて内心割と途方に暮れていた。

そんな反撃であるがまだ残暑厳しい今日、更なる試練に見舞われていた。

携帯のメッセージで話がある、と何故か反撃自身の部屋に呼び出された（ルミは庄田家顔パスである）反撃は、ドアを開けたタイミングで顔に向かって投げつけられた物を反射的に掴み、ビシッと固まった。

「……えー、ルミさん？　これは……」

「……」

自分でも何をしているかは分かっているらしく、顔が茹だるように赤いルミは兎耳をビンっ！　と強張らせながら反撃から顔を背ける。

反撃に投げ渡された物……それは避妊具の入った箱（百五十枚入り）であった。

「……ルミさん？　……こんな物を、一体どこで……？」

「……母さんに貰った」

「ホウアッ!?」

衝撃のカミングアウトをかましつつ、ルミは腰掛けていたベッドの

上に大の字で身を投げだし、ギュッと両手を固く握りしめて赤い顔でそっぽを向いてしまった。
「……あの……」
「……反撃に……それ渡しゃ……後は全部やってくれるっ、て……」
「……実の娘を何唆してんだあの人は……！」
頭を抱える反撃をチラ、と見てルミが両手を差し伸べる。
「……反撃……早く……」
「……おぉう」
何だ、一体何が起こっている。まるで理解が追いついていない反撃。
ルミがなぜこんな事になってしまっているのか。その理由は本日昼時まで遡る。

本日午前。中学校。

兎山ルミという少女はそのあっさりサッパリした性格と幼いながら整ったかんばせにより男女問わず、男子は距離が近く美人ながらも話しやすい異性として、女子は男子に対し引かない身体能力と頼りがいのある憧れの同性として、確かな人望を集めていた。
スポーツは万能で勉強は得意ではないが苦手と言う程でもなく。そんな彼女は現在、昼食の弁当を食べながら友人の女子と恋愛談義に話を咲かせていた。
まあ基本的には何組の誰々がカッコいいだの誰々は誰々と付き合ってるだのといった話題であったが、やがて女子の一人が話に参加せず黙って箸を動かしていたルミに話題を向けた。
「ルミは庄田君と付き合ってるもんねぇ。彼氏持ちはこんな話キョーミ無いか」
「は？　別に付き合ってねーけど」
「え？」
「いや、だから付き合ってねえって」

何でもないように述べられたその言葉にザワリと教室がにわかに沸き立つ。
ちなみに反撃は別のクラスである。
「え……っとぉ……ルミは……庄田君の事、好き……なんだよね？」
「……ん、まあ……」
どうやら自身の気持ちを明言するのは恥ずかしいようで、目元を少し赤く染めてパタパタと耳を動かしながらわざとらしく大きな弁当箱に集中するルミに教室内の複数人が軽く心臓を撃ち抜かれながらも、最後まで聞かねば死ねんとばかりに鬼気迫る表情の友人が「告白はァ!?」と迫る。
「……してねー」
「何でッ!!」
「だって……」
「だってじゃないッ!!」
「……ハズいし……それに……そういうのって男からするモンじゃねえの……？」
普段からはあり得ないヘタレ具合を示している力無い耳を見て、友人は「うーん」と首を傾げた。
耳への視線を感じ、ルミは赤らんだ顔のまま箸を持った手で両耳を押さえた。
「確かにそういう気持ちも分かるけどォ……でもまー、あんまうかうかしてない方が良いと思うけど？」
「何でだよ」
「何でって……庄田君、偶に女子に呼び出されて告白されてるよ？」
「は？」
量の多い弁当をルミの口に運ぶ役割を終えて箸箱に仕舞われようとしていた小学校から使い続けていたピンク色のプラ箸が、ルミの手の中でベキリと音を立ててプラ箸としてはそこそこ長い生涯を終えた。
友人はその姿を見て慌てたように手を振る。
「いいやいや待って！　全部断ってるらしいから！　大丈夫だって！

けどまーほら！　ワタシ的には!?　ワタシ的にはちょおぉぉ――――っとだけ！　急いだ方が良いんじゃない!?　っていうね!?　ハナシなわけで！」
「……告白……」
「あれっこれ聞こえてない感じかな!?　そんなにショックだったの!?」
「……何で反撃がそんな告白されんだよ」
「な、何でと来ましたかこのお姫様は……」
　焦った表情から一転、『無知っ子？　今どきリアルで無知っ子ですか？』と呆れた顔を隠さない友人に軽く手を振ってルミは「違う」と言う。
「反撃がモテるってのはまあ分からんでもねえよ。身長高くて運動できて勉強もそこそこはできるからだろ？」
「お、おう……まあ後普通にカッコいいし、優しいし？　ってかそれ堂々と言うか……なんか腹立つ……」
「けどそんなのアタシだって同じだろ。反撃よか頭悪いけどそこそこは勉強できるし、体育の成績の方は反撃より上だし身長だって女子じゃあ高いぞ。けどアタシは何回かしか告白された事ねえ」
「ん、んー？　た、確かに……てかルミあんまり告白されないんだ……意外……」
　それは男らしい男性と男らしい女性ではウケる層が違うという事だろう。
　男性は自分よりもスペックの高い女性を恋人とするのに抵抗感を覚える者が多いという事もある（ルミが告白してきた男子をことごとくほぼノータイムで切り捨てきた事実も影響している）。
　だが幼い頃より幼馴染に深い愛情を向けられてきたお陰で自身が男に好かれるタイプではない、いわゆる『女ウケ』する人間である事をルミは理解できずに首を傾げた。
「兎に角！　ルミはどうか知らないけど庄田君はモテるの！　ボーッとしてると誰かに取られちゃうよ！」
「んー……反撃がなぁ……」

「こんちゃー……ルミ居る？」
話が一段落した所でまさかの本人登場。
ルミの会話に耳をすましていたクラスの連中がざわめき、ルミと会話していた友人は「ヒョエッ」と肩を弾ませた。
「おー、なんか用か？」
「ああ、悪いけど今日ちょっと用事できたから先帰っといてくれ」
あんまりにもタイムリーなその発言に、友人の喉が再びヒュッ、と鳴る。
ルミは反撃の顔を睨みつけながら、「何でだよ」と凄む。
反撃は普段ならば「おー、分かった」と言われる場面のため、何故そんなに睨まれなければならないのかイマイチ理解できずに首を傾げるが、普通に「いや、ちょい放課後呼び出されてな」とこの場において色んな意味で最悪の台詞を言い放った。
「……女か」
「え、ああうん」
「告白か……！」
「それは知らんけども」
「告白だろ！」
「……多分、そう……かなぁ？」
首を傾げてそう言う反撃の顔面にルミの箸箱が直撃した。
「おぁ痛えっ!? 何すんだ！」
「るせえ馬鹿！ アホ！ お前なんか知るか！ どっか行け！」
「はいぃ!? ちょ、あ、お前がどっか行くのな!?」
机の上に弁当を置いたまま脱兎の如く何処かに走り去っていったルミをポカンと見て、先程までルミと話していた女子をチラリと見て、反撃は「……俺何かした？」と間抜け面のまま尋ねた。
尋ねられた女子は自分がルミの不安を煽りまくったのをひた隠し、「さぁ？ そーなんじゃん？」と周囲の白い目を完全無視してしらばっくれていた。女は誰もが女優である。
「……ルミ探してくるわ」
「早くした方が良いと思うよー」

昼休み終了間際。体育倉庫裏。

「うわ反撃」

「なんちゅう所にいんだお前……滅茶苦茶探したぞ……」

校庭の隅にひっそりと建設された小さな体育倉庫の裏側、倉庫の壁と学校の敷地を区切るフェンスの隙間という学校の端の端のそのまた端くらいの所に身を潜めていたルミの前に立ち、ぜーぜーと息を荒げながらそう言う反撃。

最初はすぐに見つかるだろうと思っていたがまるで見つからず、昼休みの間ほぼずっと走り回っていたのだ。

膝に手を当てて息を整えながら、反撃は時間が惜しいとルミに頭を下げる。

「……悪い、俺が何かしたんだよな？　考えてたんだけどまるで分からん。俺は何したんだ？　教えてくれ」

「……別に。なんもねーよ……」

「……告白の事か？」

「……」

倉庫の壁とフェンスに挟まったままブスッと膨れ面を見せるルミ。反撃はその頭をグリグリと撫で回し、ルミは膨れたままされっぱなしになっていた。

「ちゃんと断るよ。今までもそうしてきた。知ってるだろ？」

「知らなかった」

「え、マジで……？」

「……だって反撃、用事があるってしか言ってなかった……」

「……あー……」

それかぁ、と反撃はこの騒動の原因を知る。

つまり今までルミは自分の言葉をすっかり信用して、自分の用事の内容を探る事をしないでくれていたのだ。

反撃は申し訳無さと愛おしさを両手にたっぷり込め、ルミの頭をがっしがっしと撫でくりまわす。

ルミは相変わらずぶすくれた表情で無抵抗のままに髪をかき混ぜられたり頬を揉まれたりしていた。
「だいじょうぶだって。俺はルミが好きだよ。だからちゃんと断ってくるから」
「……じゃあ今日から恋人な」
「こっ、っ、おう。そうだな……」
反撃が瞬間的にギクリと身を固めるも、戸惑いながら首を縦に振った。
そうして頷いた時に授業開始五分前のチャイムが鳴り、ルミと反撃は慌てて立ち上がって教室に走った。真面目なのだ。何だかんだで。
「おかえりルミー。どーだった？　遅かったけど」
「……べっつに」
「エッチした？」
「してねーよ！」
「えー、つまんないなァ……じゃ、アレだ。ファーストキスだ！」
「あぁ？　ンなもんとっくの昔だっての」
「え？」
「あ？」
その日の放課後、これまでずっと「付き合ってはいないけど放っておけない奴が居るから」と告白を断ってきた反撃は初めて「恋人が居るから」と言って告白を断った。
そしてそれは反撃やルミを狙っていた人間の間に瞬く間に広まっていったのだった。
とまあそんな話（全年齢版）なんてどうでも良いのだ。マジで。大事なのはここからである。

放課後。兎山家。

「ルミ、反撃君と何かあったでしょ」
「ん、っふ」
家に帰ってきて手を洗ったルミは冷蔵庫からおやつの人参を取り

出し、シンクで洗っている時に母親からそう尋ねられ割と激しくむせた。
「……何でンな事分かんだよ。何もねーよ」
「もしかして告白された？　そう。あのルミがねぇ……もう十三だもんね」
「何もねーって言ってんだろうるせーな！」
割かし反抗期気味なルミの対応に余裕の態度な母は「チョット待っててねー」と言って夫婦の寝室に入り、一分程で戻ってきた。
「はいルミ！　プレゼント！」
渡されたのはルミも一応知識で知ってはいる避妊具の入った箱（百五十枚入り）であった。
いきなり親から避妊具を手渡される精神的なショックは察して余りある。
現にルミは「んぎゃわっ」と汚い声を上げてその箱を放り投げていた。
「あっおまっばっ、むす娘に何渡してんだ！」
「えー？　でもそれ子供の小遣いから考えるとかなり高いわよー？　良いから貰っときなさい」
「そういう意味じゃねえから！」
ルミが放り投げて地面に転がった避妊具の箱をヒョイと持ち上げ、母は「良い？」と幼い子供に言い聞かせるように呟く。
「ルミ、あなたの個性は兎ね……私と同じ」
「……オウ」
ルミの個性は母親譲りであった。母親はルミの緊張を解きほぐすかのようにルミの頭を撫で、耳の付け根を揉みながら言葉を続ける。
「あなたの個性の元になってる兎はね……とにかく性欲が凄いのよ」
「は？」
「従って母さんの家系も代々に渡って性欲過多で……」
「ヤメロォ！」
ルミは頭に乗せられていた母の手を振り払った。
しかし母は自身にも経験があるのか、落ち着いた顔で逃げるルミを

追い詰める。
　まだ幼いところの多いルミにとってこの状況は最早トラウマ必至である。かわいそ。
「ルミ、聞きなさい」
「嫌だ！　そんな家系の闇の話聞きたくねえ！」
「ルミ」
　普段より少しキツい口調に、逃げようとしていたルミの脚が止まる。
「その内に嫌でも分かるようになるから言っておくわ……私達にはね、エッチ無しで居られる『限界』があるの」
「……エッチ……したくてたまらなくなるって事か？」
「そういう面もあるけど、そういう影響は少ないわね」
「なんだよ……」
　安堵しているルミは気付かないが、母の言う影響は少ないというのは発情期であろうが無かろうが年がら年中色狂いであるという意味だ。
「けどねルミ……ずっとエッチしないと、恐ろしい事になるのよ」
「……恐ろしい……」
「そう……物凄く……」
「物凄く……？」
「……体調が悪くなるの」
「……は？」
　呆気に取られたルミは間抜け面を晒すが、母は気にせずに言葉を続ける。
「私達はね、エッチと体調が物凄く密接に関係してるの。長い間ずっとエッチしてないと……もう恐ろしいのよ。まず頭痛が毎日ガンガン頭を揺らすようになるわ。それからお腹が四六時中ギリギリ痛むようになって吐き気で眠れないようになるわ。目眩が不規則に襲ってきてまともな生活も送れないし、血流が悪くなって脚が破裂しそうなくらいパンパンになるし……」
「……おぉう……」

「それを抑える為にお医者さんに行って生物個性系のホルモン調整剤を貰うんだけど、毎食後四粒も五粒も錠剤を飲んで、副作用で眠れなくなるし、肌は荒れるしお腹は下すし……それでも完全には抑えられないし、保険が利いても毎日何十粒って量の薬飲むとお金もどんどん溶けていくし、毎日イライラするし……」
「……おぉぉう……」
　思ったのとは全然違った。けど思ってたよりも本気でキツそうであった。
　ルミは完全に副作用にいわゆる十八禁的なのを想像していた為に意地を張って「そんくらい耐えたらぁ！」と言うつもりであったが母親のガチな雰囲気に口を閉じてしまう。
　母は愚痴っぽくなった空気を仕切り直すように何度か咳払いをし、
「兎に角！」とルミに避妊具の箱を渡した。
「今日やれなんて言わないわ。別にいつでも良い。あなた達のペースで進みなさい……けど、今言った事は覚えておいて……ごめんね、こんな事言って」
「……うん」
「あ、やる時は絶対にソレ付ける事。私達ってどうも個性柄か知らないけど一回中に出されるとそれが癖になっちゃう事があるから」
「聞きたくねえそんな話！」
「かく言う母さんも十五歳の時にお父さんに中に」
「わあああ！　反撃んチ行ってくるから！」
「帰ってこれない時は連絡してねー」
「うるせえ！　誰がするかバーカ！」
「あ、やり方なんだけど反撃君にそれ渡せば多分全部してくれるわ！」
「バァーカ！　大嫌い！」
「アハハハハ」
　逃げるように反撃の家を飛び出したルミは、そのまま隣の家の玄関のインターホンに指を当てた所で家から出てきた反撃の母と対面した。
「ルミちゃん」

「おばちゃん！　買い物？」
「ん、晩ごはん買いにね～……で？　もしかして今日ウチで食べたいの？」
「え」
「何かあったんでしょ？　ルミちゃんの事なんて生まれたときから知ってるんだから、顔見れば分か……」
　柔らかくルミを見つめる反撃母の視線が、ルミの胸の下辺りに集中した。
　疑問に思ったルミが下を見ると、当たり前であるが先程母に渡された百五十枚入りの避妊具がその手に握られていた。
「……あ……」
「……んん……」
「や、ま……ちが、おばちゃ……」
「……ちょっと遠くのスーパー行ってくるわァ～！」
「うわあああ!!　待って、待っておばちゃん!!!」
「あ、これ鍵ね」
「あ、ども」
「行ってきまーす！　あ、二連撃は連れてくから気にしないでいいわよォ」
「わあああ!!」
　反撃母に誤解された（一概に誤解とは言えない）事で消沈したルミはいつもの習慣で庄田家二階にある反撃の部屋に入り、ポス、とベッドに倒れ込んだ。
　恐らく外に出たりした後そのまま寝転んだりしているのだろう。反撃の匂いと制汗剤の匂いがルミの身体を包み、ルミは薄いタオルケットを引き寄せて身体に巻きつけた。
「……もう……いいや」
　今日一日で反撃と幼馴染から恋人になり、母に家系の闇を聞かされたついでに反撃母に比べ自分の母が若い理由を強制的に知らされ、そして反撃母に避妊具を抱えてヤル気満々（誤解）な所を見られた。
　いい加減そろそろやけっぱちになってきたルミは携帯のメッセー

ジアプリを起動し、告白の返事をしているのであろう反撃に『話がある』『お前の部屋に居る』『はよこい』とメッセージを打ち込み、ついでに腹いせのようにスタンプをアホほど連打した。
「……反撃……」
ルミは反撃の匂いに包まれながら、何やかんやでずっと握りしめていてぬるくなったニンジンをボリ、と噛んだ。
手持ち無沙汰なルミは避妊具の箱を開けてギッチリ詰まったその中身を取り出して眺めたり反撃の枕に顔を突っ込んで匂いを嗅いだりしていたが、携帯がブィィと震えた事で飛び跳ねるようにそれに飛びついた。
「反ッ」
情報サイトの宣伝メッセージだった。
「……フンッ」
荒い鼻息を吹いて携帯を放り出すルミ。
しかしその携帯がもう一度震え、ルミは今度はそっと画面を確認する。
今度は反撃からのメッセージで、『断った』『走って帰る』と打たれていた。
ルミはそれに適当なスタンプを返し、ポシュムと再びベッドに寝転び、携帯をいじる。
「エッチ　初めて」とか「エッチ　毛」とか「コンドーム　使い方」とか、他人に見られたら五回は死ねそうな検索履歴を量産しながらルミは一夜漬けならぬ十分漬けを敢行する。
個人的に定期テスト勉強期間は遊び回って本番直前の休み時間に十分漬けに全てを賭ける学生は常にクラスに四分の一は存在していたが、あれは正直賭けるには分が悪すぎる気がするし今はそんな話をしている訳では無いので早々に反撃到着である。
「ルミー？」
「フォワッ」
正確性に著しく欠けるネット知識の詰め込みに夢中になっていたルミは扉の開く音と反撃の声に反射的に近くにあった避妊具の箱を

投げる。
「おおっ!?」と声を上げる反撃を見ずにルミは素晴らしい速度で携帯のブラウザで開いていたタブを全消去し、履歴まで消した上に携帯の電源まで落とした。
その携帯をベッドと壁の隙間に突っ込んで、何でもないかのようにベッドに座り直した。
「……えー、ルミさん？　これは……」
「……」
戸惑うようにそう聞いてくる反撃。
声音からしてその箱の中身が何なのかは知っているのだろう。
何で知ってんだよという気持ちとそれを投げ渡したのが自分であるという気持ちが複雑に、そりゃもう複雑に絡み合ってルミは反撃の顔を見ることができなかった。
「……ルミさん？　……こんな物を、一体どこで……？」
「……母さんに貰った」
「ホウアッ!?」
まあそういう反応になるわな、とどこまでも冷静な思考をするルミは脳内の一割にも満たず、残りの九割は大体部屋に入ってきた反撃とこれから行われるであろう行為に対しパニックを起こしていた。
だがそこで、ルミの母の金言がふと脳裏をよぎる。
反撃に任せれば全部ちゃんとやってくれる、と。
元より物心ついた時から反撃にベッタリで、反撃という人間に全幅の信頼を置いているルミにとっては反撃に全てを任せるというのはほぼほぼ事故の無い安牌であるというのと同義であった。
故にルミは、ベッドにゴロンと転がって脱力し、反撃に全てを委ねた。
「……反撃……早く……」
「……お、おぉう……」
だがしかし目の前の男は動かない。
反撃は慎重、ないし臆病な男である事はよく知っていたルミはベッドからガバリと起き上がって反撃の腕を掴み、勢いよく反撃をベット

の上に引き込む。
「おわっ、る、ルミ」
「反撃」
「はい」
「早く……」
「……はい。スミマセン」
グッ、と覚悟を決めた反撃はルミのスカートのホックを外し、チャックを下ろして脱がせる。
それを適当に畳んで床に置き、今度は襟にかけているワンタッチ式のリボンを外した。
羞恥に頬を赤く染めたルミはかなり興奮しているようでフッ、フスッ、フゥッ、と荒い息を吐いている。
反撃はルミのシャツのボタンを一つ一つフツリ、フツリ、と外しながら力が入って固くなっているルミの耳をクシュクシュとほぐした。
「ルミ、緊張しすぎ」
「フッ、フッ……ハッ……キンチョ、してねえし」
「……んー」
始めるまではとことん臆病なくせに始まったらもう止まらない反撃は、「ルミぃぃ～っ」と甘えるような声で囁きながら、ルミの身体を抱え込むようにギュウッと抱き締めた。
緊張と共に軽く恐怖を感じていたルミはしばらく固まっていたが、反撃がルミの手を自分の背中に誘導したことで反撃をギュウギュウと力強く抱き締めた。
「……んんぅ、反撃……」
「ん？」
反撃を抱き、反撃に包まれて先程よりかはリラックスした表情のルミ。
そのルミはリラックスしているからこそ気がついた事を反撃に尋ねる。
「……なんか慣れてね？」
「気のせいだろ。むしろどのへんが？」

ルミはベシッと反撃の腕を叩く。その腕はシャツのボタンが外れてできた隙間に手を入れ、ルミの背中に回ってブラのホックを外していた。
「このへんだよ」
「……いや、生まれてこの方女性経験なんて一切無いよ？」
「今の間は」
「……いやマジで」
「オイ」
「本当だって！　信じてくれよ！」
「胸揉みながら言ってんじゃねえ！」
ポヨポヨと掌でルミのまだささやかな膨らみを弾ませながらタワケタ事を抜かす反撃。
そんな反撃の態度に牙を剥くルミの背中を、反撃は宥めるように撫ですさる。ついでに残ったシャツのボタンも外していく。
やがて、ルミが何かを言う前に反撃の手によってルミは上半身を裸にされてしまった。
「んあ、反撃……！」
「はいはい、ルミ、落ち着いて……」
反撃は再び緊張してカチカチになってしまったルミの滑らかな肩に手を置き、ちゅ、くちゅ、と微かな水音を立てながら何度となく首筋にキスを降り注がせる。
「んっ……はん、げき、ンンッ……はんげき……」
「ルミ」
「反撃……もっと」
「はいはい……下、触るからな」
「ん……」
シャツに包まれていた滑らかな肌を撫でながら、反撃はルミのショーツの上から性器を上から下に、撫でるように幾度と無く指を往復させる。
まるでマッサージのように、少し力を入れて撫でられる度にルミは「ん、んふぅッ」と鼻息を荒くした。

「……っふ、ぅ……反撃……お前……っ、やっぱ慣れてんなァッ!? ッフ、ンぁぁっ！」
「初めてだって。今までずっと一緒に居たろ？」
「っそりゃ、そうッ……だけどっ！ っふッ……クぅんっ！」
ズリッ、ズリッ、と湿ったショーツ越しに性器を撫でられる度にルミの肩から背中にかけてがビクンと跳ね上がる。
ルミの前髪の生え際に珠のような汗がプツプツと浮かんでいるのを見つけた反撃は、ルミの背中に回していた腕をベッドサイドにあるエアコンのコントローラーに伸ばし、温度を数度下げる。
それと同時に性器を虐めていた手で彼女の白い前髪を掻き上げ、その汗を吸い取るように額に口付けた。
汗の塩味とルミの甘ったるい体臭、そして制汗剤の苦味が反撃の口腔を満たす。
「っふ、んふぅっ……は？」
「うん、しょっぱい」
「……ッオオワッ!?」
声を出さないようにと必死に口を閉じて反撃の愛撫に耐えていたルミが、その変態じみた行為に泡を食って反撃を突き飛ばす。
「おわっ!? 何すんだよ」
「何、なにじゃねぇだろが！ 今おまっ、汗舐めたのか!? あ、あ頭おかしいんじゃねえの!?」
自分の身体の匂いをシュンシュンと鼻を鳴らして嗅ぎながら、ベッドの下に落ちていた制服のシャツで必死に身体中の汗を拭うルミ。
その白く長い耳は身体の緊張を表すようにピンと立ち、ベッドの端まで突き飛ばされた反撃にすら見える程に力んでブルブルと震えていた。
「……ああ、そっか。制服って事はそういう事か」
反撃はルミの態度を察する。今の季節はまだ秋とは言えないような残暑厳しい季節である。
そんな中、クーラーもあまり効かないような学校で一日過ごしたのだから相応に汗はかいているだろう。

そして制服という事は勿論シャワー等も浴びていない。ルミは反撃の汗舐めによってそれを思い出したという訳だ。
「……ちょ、ちょい待ち、タンマ！タンマ……シャワー、一回浴びてくる……から」
そう言ってイソイソと汗を拭ったシャツを股に当て、ブラを胸に当てるだけ当てた状態でベッドから離れようとするルミに反撃が一応の説得を試みる。
「おーいルミ、俺は気にしない……」
「お前が気にするかとか知るか！　ワタシが嫌なんだよ！」
説得はあえなく失敗に終わり、後には興奮した自分の性欲を持て余す反撃だけが居た。
「……汗かいてんのは俺もなんだけど……」
一緒に入りたいが、あの精神状態では行ったら蹴り殺されるだろうな、と反撃は一人察し、ベッドに座り直す。
この状況でも膨らんだままの学生ズボンが、少しだけ情けなかった。

そして十数分後。

「……オウ、出たぞ」
反撃はルミが帰ってきたら、入れ替わりで自分がシャワーを浴びるつもりだった。
が、その思いは部屋に入ってきたルミを見て霧散する。
「……着るもん、無かったっけか」
「……横がアタシん家だし、泊まる必要ねえもん」
ルミは、その褐色のスラリとした健康的な肢体をバスタオル一枚で包んだだけの姿で反撃の部屋に戻ってきたのだ。
成長期真っ盛りで少々筋張っており、女らしい柔らかさという物には多少欠けているルミの脚は、普段の堂々たる居住まいが嘘のようにキュッと内股気味に閉じられ、手はバスタオルを抑えるために片方が胸元、片方が股近くで布地を引っ張っている。

普段から使っているために随分と色褪せている青色のバスタオルに包まれたルミの身体は色々と我慢していた反撃には扇情的過ぎた。少なくともシャワーを浴びる気が失せる程度には。
「ルミ、コッチに」
「あ、ん、おう……」
濡れて少し面積が小さくなったような兎耳を毛並みに沿って揉むように撫でながら、反撃はルミをベッドに座らせ、そのままの勢いでベッドに柔らかく押し倒す。
「ぁ、はんげ……ン、んっ」
シャワーの熱と羞恥心で目元を赤らめながら反撃の名を呼ぼうとしたルミは、その口を反撃に塞がれて観念するように目を閉じる。
反撃は首元に回されたルミの腕を軽く撫でつつ、胸の前にあったタオルの端を引いてその身体を露出させた。
完全に裸になったからか、それともズレるタオルがくすぐったかったか、ルミがゴソリと身じろぎしたが反撃により強く唇を抑えられ、そちらに意識を集中する。
「ん……んッ、んプッ……ふぅん……!」
モソモソと腰をくねらせながら何度も顔の角度を変え、より深く繋がろうとするルミ。
そんなルミの口内に反撃がヌルリと舌を差し入れ、その感触にルミの肩が大きく跳ねる。
「んんッ!? ッん、ふ……ッ、プぁ……はぁ、反撃?」
小学校の頃からこれまでずっと行ってきた口を合わせるだけのキスではない、もっと深いキスにルミは戸惑いの声を上げる。
彼女も中学生だ。一応情報としてそういうキスがあるのは知っていたが、実際に反撃の舌の感触を味わって戸惑ったのだ。
「大丈夫……もう一回やるぞ」
「ウン……んあ、ん……」
外弁慶とでも言おうか、普段はどこまでも怖いもの知らずな癖してベッドの上では意外に臆病な兎をあやすように撫でながら、反撃はルミと舌を絡め、彼女の歯茎を撫でるように舐め回し、上顎を舌先でチ

ロチロと擽った。
その度にルミはビク、ビクン、と腰を震わせ、か細い啼声を反撃の口の中に零している。
「ん……っふ……ぅンッ!?」
突如、ルミの背骨に快楽の電流が迸り、腰が大きく跳ね上がる。
が、反撃がその図体で押し込めるように体重をかけてくるので彼女は逃れることもできず、目尻から一粒、二粒と涙を流しながら反撃の首に回した腕に力を込め、恋人との口交にのめり込んだ。
ルミに走った快楽の正体は、ルミの性器に手を伸ばした反撃によるものだった。
シャワー前で既に相当興奮が高まっていた所にこれまでとは違う、肌を擦り粘膜を嬲る直接的な刺激が齎されたルミの秘所はその潤いを増し、ルミは一つ、また一つとポロポロ快楽の涙を流しながらグイグイと噛み付くように反撃の唇を食んだ。
性器の入り口に指を少し入れ、クリュクリュと優しく、絵の具を混ぜるようなソフトタッチで粘膜を擦ってやると、ルミは「ンッフゥウ……!」と鼻声を出しながら腰をビクビク震わせる。
「んっ、ふぅんっ、ンぁッ！　はん、ハンゲキッ！」
唇を離した瞬間に大きく息を荒げながら、涙の溜まった瞳に恐れを乗せ、許しを請うように反撃の名を呼ぶ。
「よしよし、大丈夫だぞ、上手く気持ちよくなれてるな。偉い偉い」
「ふぅう……ク……ぅン！」
未知の感覚にいつになく気弱になっているルミの頭を撫でさすり、もう片方の手で膣道にある輪状の筋肉の筋をコリッ、コリュッといじると、その度にルミの身体が大きく震える。
「アうっん、ハッ……アッ！　ハンゲキ……」
「気持ち良いか？」
「ンっ、わかんねっ、わかん……ックあんッ!?」
トロンと力が抜けた、勝ち気な吊り目からポロポロと涙を零して喘ぎ続けるルミの白髪を漉くように頭を撫で、クッ、と頭を寄せて耳元で呟く。

「ゾワゾワする？」
「んッ……っふ……！」
「ルミ、腰ゾワゾワするか？」
「する……ッ、ゾワゾワ……してるッ！　ッふぅっ……！」
　膣道を責める手はそのままに、ヘタリと力の抜けた兎耳の付け根をもう片方の手でコリコリとマッサージしてやり、反対側の耳に口をつけ、歯は立てずに唇だけでハムハムと甘噛する。
「んぁ、ンンッ！」
「大丈夫か？　あんまり中を擦らないようにしてるけど、痛くないか？」
「聞ッ……く、なァ……馬鹿ぁ……！」
　パルパルパル、と動こうとする兎耳を唇だけで抑え込み、フワフワした内耳の毛によだれを垂らし、ジュッ、と音を立てて吸い込むとルミは先程まで声を抑えつけていたのが嘘のように、「んやぁっ!?」と大きな声を上げ、ヒクヒクと全身を震わせた。
「ルミ」
「あ、あっ、や……そりぇ、ヤぁ……！」
　か細い、明朗快活な普段からは考えられない程に細い声で虚空に喘ぎ声を漏らすルミの、ジュクジュクに湿らせた側と反対側の耳毛をふやふやと弄り回すと、そのクシュクシュという音に驚いたルミの感情が、反撃の腰に沿わされたふとももがビクビク震える事で伝わってくる。
「んんッ」
「ルミ、気持ち良いか？」
「わ……っ、かんなァ……ッ！」
「どんな感じ？」
　ビクッ、ビクンッ、と震えるルミの胸から腰を体重で押さえつけ、左耳を咥えてヂュッ、ヂュっと水音を響かせ、右耳の耳毛をフワフワと擦り、耳穴のふちを柔らかくなぞるように指を動かし、グシャグシャの洪水状態になっている性器を下手に摩擦しないように、圧迫を中心にして弄り回す。

「やぁ……あっ、あ！」
　勿論、そのような三点攻めを行われたルミは、まるでバネ仕掛けのように腰を跳ねさせるが、反撃の大柄な四肢に押さえつけられ、思うように衝動を発散できず涙を零した。
「ルミ、どう？」
「やッ……だぁ！」
「どんな感じ？」
「やぁ……！」
「嫌なの？」
「んッ、ンッフッ！　あぁ、やぁぁ……」
　腰をビクビクと痙攣させて涎を零しながら涙を流す。そんなルミを見て、手と唇を耳から離し、性器を圧迫する指を止めて涙の溢れた筋をチュッ、チュ、と唇で拭い取った。
「はぁ、はぁァ……ハンゲキ……」
「ん」
「ん、ンッ……チュ、ふぅっ、ん……ハンゲキぃ」
　こちらを向いて口を小さく開いて可愛らしい舌を覗かせ、名を呼んでキスをせがむルミに反撃は望むものを与える。
　ひとしきり舌を絡ませて唾液を交換した後、感触を忘れないように、と性器に入れた指をやわやわ動かしつつ、反撃は再びルミの頬に唇を落とした。
「どんな感じだった？」
「あ、ア、ンッ……腰の、奥がぁ……ゾゾッてなって、なんか……」
「なんか？」
「……その、ゾゾッて感じのやつが、外にウワーッてなって溢れる、感じ……」
「そっか……気持ちよかった？」
「……わかんね」
　真っ赤に染めた顔をプイと背けたルミの顎を軽くつまみ、唇を重ね合わせる。
　何度か舌を絡ませあい、最後にチュッ、チュ、と触れるだけのキス

を繰り返してから汗に濡れ、乱れた前髪を梳く。
「……ルミ、そろそろ……いいか？」
「……んん」
キュッと軽く握り拳を作り、顔を反らして言葉少なに催促をするルミの頭を撫で、耳を弄り、胸の先をクリクリといじめながら、片方の手でサッとゴムを着用する。
「ゆっくりいくか？」
「痛えんだよな？　……一気に、やってくれ……」
「分かった……もしも、あまりにも痛すぎたら蹴り飛ばしていいからな」
「……しねえよ」
クチュ、とゼリーで濡れたコンドームの表面をルミの性器にあてがい、何度かトチュ、ツチュ、と亀頭の中ほどまでを抜き差しし、それからルミの腰のくびれを掴む。
「いくぞ」
「おう」
「力抜いて」
「抜いてる」
「緊張してる？」
「してねえ」
「耳がビビってるけど」
「ビビってねぇ！　さっきからしつけえぞ！」
「ハイ挿入っ」
「オ゛ッ!?」
会話によって気を紛らわせたその瞬間にルミの処女を奪い去る。
グシャグシャに濡れそぼった膣道を男性器が通り、彼女の処女膜を軽く千切る。
ブチブチッという、コンドームが破れたのに似たような感触が男性器に伝わり、入ったよ、と反撃がルミに言おうとした瞬間……その脇腹にルミの膝が直撃した。
「ゴボッォオア!!?」

「痛ッッッてエェェ!!!! アッ……がッ、痛ッてえ! アッッ……ッだァァァ……!! ガァっ、マジで……痛え……! うわ、血だ! 血が出た! うぉ、うおぁ!?」
唐突に真横から刺激が来たことによりベッドから突き落とされ、床に頭をぶち当てた反撃と、予想を遥かに超える痛みと出血量にどうしても動揺を隠せないルミ。
ワタワタと机の上のティッシュを取ろうとするが、身体を動かして他人のベッドにこれ以上血を流すのも憚られてまごまごしているルミを床に横たわりながら見ていた反撃は、自分の男性器がシナシナと力を失っていくのを感じて嘆息し、コンドームをペッと外した。
「……ルミ、とりあえずバスタオル使ってくれ」
「反撃! テメェもうちょい入れるときなんかあんだろーが! あんな不意打ちじゃなくてよ!」
「……そだな、今痛感してるよ……イテテテ」
少し瞳を潤ませて「う〜……」と小さく唸りながらバスタオルを股間に押し当てるルミを立たせ、内に染みる前にベッドのシーツを剥ぎ取る。
「ルミ」
「……アんだよ」
初体験が完全に失敗に終わり、キュッと不機嫌そうに口を固く引き結んでいる彼女の肩を軽く抱き寄せる。
「一緒に風呂、入ろう」
「……ん」
若干むくれながらも素直に頷くルミの腰を抱き、ヨタつきながら歩く彼女を支える。
「痛いか?」
「さっきほどじゃねえけど」
「無理はすんなよ」
「……気にしすぎだっつの、ばーか」
狭い家である。モタモタ歩きつつもすぐに辿り着いた風呂場で、ルミの性器の少し上……ヘソのちょっと下辺りにシャワーを浴びせ、流

れる水で血を洗う。
まだ怪我をしたばかりの性器に直接水を当てるのはやめた方が良いだろうという反撃の判断である。
「……」
しばらくの間は今日一日の残念っぷりに不満げにむくれているルミであったが、反撃がそれをあやすように胸の下から性器の……淫核の上辺りまでの腹を揉み込むようにマッサージし始めると、その顔もじんわりと変わり始める。
何せ、気持ちよかった。
反撃の、ルミのそれより二周りは大きい掌は、拡げた親指から小指までルミの腹の三分の二を包む。
そんな大きく、そして暖かい掌でシャワーの水流に沿うように、愛情を感じる柔らかい手付きで撫で擦ってくるのだ。
ハッキリ言って、溜まったものではなかった。
「や、ん、やっ、ぁ……」
「嫌(ヤ)？」
「……んっ、んっぅ、はっ……あ！」
「嫌(ヤ)じゃない？」
「んっ、んっン、ふんぅっ!?」
臍の下辺りから膀胱辺りを伸す様にグッ、グイッ、と押される度、ルミの肩から尾骨にかけてがビクッ、ビクンッ！　と痙攣する。
感じやすいな……等と呟きつつも手を止めない反撃は、もう片方の手で脇腹の肋骨のラインを撫でたり、彼女の顎をキュッと持ち上げて唇を奪ったりと、性感と興奮度を下げないように勤しんでいた。
「んっんっ、ンッ……アんッ！　ハンゲキ、おなかッ、おなか、やめっ……ろぉ……！」
「気持ちいい？」
「あッ、ンッ……ゾワゾワ、ザワザワっ、するから……！」
乏しい……というか十三歳相応の性知識しか持っていない彼女は今自分が子宮性感(ポルチオ)開発をされているなど気づかず、シャワーの水と涙と汗と鼻水とよだれで顔をグシャグシャにしながら、それでも逃げた

りはせずにいじらしくも反撃の太い腕にしがみついてヒンヒンと啼いて耐えていた。
「……ルミ」
「あっあっ……ンッ、は、ハンゲキ……？」
「ルミの顔見てると、スゲー虐めたくなるんだよな」
「へっ……!?　わ、待っ、待あっアッんやぁっ!?　んぶっ！」
上から抑え込むように唇を奪った反撃は、片手で腹の上からクンッと親指で子宮を押し、もう片方の手で血の流れきった膣道に指を入れ、入り口のプツプツとした突起がある部分をグリッと腹側に膣を押し込む。
「んっ!?　ンック……んゥ～～～～!!」
反撃に与えられた快楽に一切耐えられず、腰をガクガクと傍目から見て普通に分かるぐらいに震わせて絶頂したルミ。
「ンッ……ンふ……っぷぁ」
体力を使い果たしたか、グテ……と全身の力を抜いて反撃に預けるルミ。
「気持ちよかったか？」
「……」
そう聞かれた彼女は、水に濡れてものすごく細くなった兎耳をフワリと軽く揺らし、呆けた顔でカクリと頷いた。
「ハンゲキ……？」
「ん、どうした」
「……もっかい、やって……今の、ギューってやつ」
そう言いながら、力の抜けた腕を彼の首に回して引き寄せようとする彼女に抗わず、再び深い口付けを始める。
「んっ、ぷぁ……」
「……なぁ、ルミ？　俺も気持ちよくなりたい」
「ん？　……ヤダ。あれイテーもん」
「……ツスか」
「あんなん、好き好んでやる奴の気がしれねーよ」
フンスと鼻息を荒げながら両手を広げ、当然の如く奉仕を要求する

彼女に呆れた笑みを見せつつも再び唇を重ね合わせる。
「……けど、いつかはやろうな」
「……えぇー、ヤだ。もう二度とやんねー！」
「ええ!?」

九年後。反撃、ルミ、二十二歳。

とある街中。昼時。

「失礼、たった今現着したのですが、状況を教えて頂いても」
「うん？　……ああ、そうか。ご苦労さん」
とても微妙な顔で歓迎された事に首を傾げつつ、反撃とルミの二人はそこそこ高いビルに登って何やら大声で喚いている男を確認する。
「オラァ！　誰でもいいから掛かってこいやオラァ！　俺はどんな奴の挑戦でも受けるぞコラァ！　できれば女お願いしますオラァ！」
「何あいつ、もうぶっ飛ばしていいか？」
「いえ、それが厄介な個性持ちでして……」
既に現着していたヒーローは参ったと言いたげにヴィラングループの立て籠もっているビルを物陰から眺めている。
そんなヒーローの煮えきらない態度に首を傾げる反撃は、その心を問う。
「と、言いますと？」
「アイツらは三人組みたいでな……一人が『空気障壁』の個性、もう一人が『ぬめる』個性で、最後の一人が相手を分析する個性で……」
「大した事ねえな！　全部蹴り飛ばしゃ関係ねえ！」
「ちょ、ヤメっ!!!」
情報提供をしてくれていたヒーローの言うことを最後まで聞かず

に飛び出していくルミ。
若者らしいと言えばらしい、その無謀な行動は、自身の実力とパートナーへの信頼故であるが……それは間違いなく周囲を心配させるような危なっかしいもの。
「オラ！　大人しくお縄につけっての！」
そして、そのツケを払う時間はその後直ぐに訪れる。
「お！　女だ！　ヨシ！　しかも新進気鋭のラビットヒーローミルコ！」
「あ？　アタシだったらどーしたよ？」

ヴィラン三人組の一人……銀縁メガネをかけたハゲが、眼鏡と頭部をキランと煌めかせて、叫んだ。
「ミルコの初体験は！　十三歳ッ!!!!」
「十三歳ッ!?」
「ヒョー！　流石ウサギだな!!」
「……は？」
唐突に発せられた言葉と、それに盛り上がる三人組に一瞬ポカンとするルミだが、その言葉の意味を察し……ボッ!!　と途端に赤面した。
……そして、飛び出したミルコの後を追う反撃と元居たヒーローが、ヒソヒソと語る。
「相手の分析をするヴィランだが……その……内容が」
「ソッチ系ってワケすか……」
まさかまさかの個性に、ガックリと反撃が肩を落としている間にも攻撃（暴露）は続く。
「経験人数は一人ッ!!!」
「オイオイオイオイ!!　あの見た目で純愛かぁ!?」
「いやまだレイプ経験の可能性があるぜ!!」
「オイコラ止めろテメーらぶち殺すぞ!!」
怒り狂ったルミは凄まじい勢いで特攻するが、怒りに飲まれた彼女は簡単に敵のヌメるトラップに引っ掛かり、三人組が居るビルから滑

落する。
「人生通算セックス回数一万四千飛んで二十二回ッ!!!　総絶頂回数九万五千五百八十六回ッ!!!」
「じゅ、純愛ですかぁぁぁ〜〜〜っ!?」
「オイオイ!!　これ男の方が一日四回以上ヤッてる計算になんぞ!?　絶倫野郎じゃねえか!!　しかもなんつーテクニシャンだっ!!!」
「殺す!　ぜってえ殺すっ!!!」
　隣りにいたヒーローから物凄く……物凄く生暖かい視線を感じながら、落ちてくるルミの足を掌で受け止め、衝撃を蓄積する。
　反撃の個性は衝撃の吸収、そして好きなタイミングでの開放。
　……つまり、ビルの上から落ちてきたルミの落下分の衝撃を、トランポリンのようにそのまま彼女に返せるという事である。
「中出し回数ゼロ!　妊娠回数ゼロ!　オナニー回数二十三回……二十三回!?　少なッ!!　最後にセックスしたのは二時間前!!　オナニー回数こんだけってことはマジであの回数イカされたのかっ!?　すげー!!!」
「マジでセックスしかしてねーんじゃねえか!!　すげーな!!」
「いやぁマジかよ大当たり……あ、やべ」
　ビルの上で女の情報を元に盛り上がっていた三人の変態は、ドンッ!!　という重い音に顔を向ける。
　……そこには、反撃の能力による大跳躍でヌメっているビル壁に一切触れることなく屋上に辿り着き、上に張られていた障壁を一蹴りで砕いたルミであった。
「……アタシは言ったよなぁ?」
『……な、何をでしょうか……』
　ドスの利いたルミの声に、思わず返答がハモる三人。
　その三人に、人を食い殺すような笑みを浮かべたルミは、片脚の踵をガヅッ!!　と床に叩きつけた。
「……絶対、殺す……ってなァッ!!」
『……お、お助けェェェ!!!』
　断末魔の叫びが響き渡るオフィス街にて、ビルの扉がヌメって開け

られない事を確認した反撃は隣のヒーローに「どうします？」と尋ねる。
「……いや、どーしようも……あ、隣のビル伝いに行くかな……しかし、若いねぇ、二人共……」
「……ハハ……」
反撃は乾いた笑いを漏らすに留めた。
……尚、この一部始終はヴィラングループが生配信しており、ルミは次年度の非公式ランキング『エロいヒーローランキング』にて堂々一位を獲ってしまう……が、この動画のお陰でルミのこの三人組に対する過剰暴力に対し情状酌量が為され、彼女は暫くの間苛立っていた。
「だぁークソが！　反撃！」
「ほいよ」
「ン！　ヤんぞ！」
ストレスの分セックスの回数も増えた。